

教育講演報告

「放射線看護の未来」

Future of radiation oncology nursing

橋口 周子

Chikako HASHIGUCHI

兵庫県立がんセンター看護部 がん看護専門看護師

Hyogo Cancer Center Department of Nursing

放射線治療における看護の役割は、「管理」「クラーク」「コンサルテーション」「カウンセラー」「患者・家族への教育」「患者ケア」「研究」など多岐にわたる。その中で、「患者教育」と「患者ケア」は、どの文献でも記載されており、役割の中心である。これらは、「心理社会的支援」「意思決定のサポート」「治療継続のための環境調整」「教育／オリエンテーション」「有害事象のリスクアセスメントと予防のケア」「症状マネジメント」「セルフケア支援」「家族支援」「医療者間の調整」として、実践レベルでコンセンサスが得られているのではないだろうか。

これら実践は、放射線治療の流れの中で、継続的に、あるいは、その場面のポイントのケアとして提供されている。内容によっては、医師や技師も実践しているが、その中で、看護のユニークな関わり方がある。たとえば、治療のオリエンテーションの場面では、医師からの説明内容に対する患者の反応により、渡す情報の量を調整する、有害事象の影響を生活の支障に引き付けて説明するなどがある。これは、看護が支援を行う上で、患者を全人的に捉える、生活に焦点を当てる、対象者の力を引き出す、環境に働きかけることを core value としていることによる。その為、放射線治療領域での看護の意義は、患者支援に厚みを加えること、治療完遂に向う確実性を高める、QOLの維持・向上に貢献することにある。

放射線治療看護領域では、がん放射線療法看護認定看護師の誕生や外来放射線照射診療料の算定に伴い、治療部門に看護師が配置される施設が増加するなど、徐々に人的な環境は整備されつつある。その中で、放射線治療看護は治療前～治療中を中心に展開されている。しかし、実際には、放射線治療に関する知識や経験の乏しい看護師が配置されることもある。放射線治療部門で必要な職種として認知されてはいるが、看護の専門性を多職種、あるいは患者に発揮しているかといえは十分ではない現状があり、放射線治療を受ける患者へのケアの質という点では、差が広がっているのかもしれない。

がん医療の現状では、生存率が延長し、長期生存者が増加している。それにより起こる課題や問題への支援のニーズがある。また、患者の高齢化に伴い、今後、放射線治療を受ける患者の増加が予測される。その中で、安全に、安楽に治療をやり遂げるための支援や治療に関する意思決定場面での支援が必要となる。治すことを支える支援に加え、治療をしながら（した後）、また、病気と共に「どう生活していくのか」を支える支援が必要である。

doi: 10.24680/msj.6.1_68

放射線治療看護領域の課題や取り巻く医療の状況を踏まえ、放射線看護の未来に向けて、今からできることを述べる。まずは、体制整備を行う。特に、特に治療後の患者への支援の窓口をつくること、その支援をノウハウとして蓄積していくことが必要である。また、高齢患者の支援として、受療の妥当性をスクリーニングすることや治療をするのであれば、院内外のリソースと連携した体制を整備する。次に、質の格差については、学びの場を作ること、各施設での取り組みを積極的に共有すること、また、均てん化すべきこと集約化することを明確化することが必要である。最後に、放射線治療での看護の専門性の発信として、当該分野で看護ができることを言語化し、特に、対看護職、対看護管理者に行うことが必要である。